

タンゴの歌詞をたのしむ会

2013年 4月29日 N.N.スタジオ

♪タンゴの歌詞はどのように作られる？ 高場 将美

タンゴに限った話ではないですが、歌詞は「詩」の1種です。でも「歌われる」ことに存在価値があり、純粋な(?)詩とは呼びにくいものもあります。

スペイン語のポピュラー音楽とフォルクローレの歌詞は、伝統的に**定型詩**(パターンはいろいろあり、途中に変化をはさむこともあります)でなければなりません。また、要所で**脚韻**(フレーズの最後の母音をそろえること)をふんで、ことばのリズムのパターンに統一感の美しさを与えます。

スペイン語の詩あるいは歌詞の、音の最小単位はシラブル(スペイン語 *sílaba*)です。1シラブルは、母音ひとつだけ・あるいはつながった2~3母音、ひとつ、あるいは2・3重母音の前または後(時に両方)に子音が付いたものです。母音がいくつかつながったとき、どこでシラブルの切れ目にするかは、文法上では決まっていますが、詩や歌詞ではそのときに応じて作者が決めます。

スペイン語の歌詞は、ひとつのシラブルが、必ず、ひとつの音符に相当します。フレーズの最後のシラブルにアクセントがあるとき、そこはふたつの音符にすることがあります(タンゴでは、ほとんどない)。また歌手が、音を揺らせたり、細かく割ったりする表現はありますが、根本的に、歌詞の1シラブルは、メロディの1音になります。歌詞の字余り、字足らずは許されません。

定型や脚韻については、実際の例で説明するのが、いちばんいいので、まず、1903年につくられた曲から聴いてみましょう。

1. エル・ポルテニート(ブエノスアイレスっ子) *El Porteñito*

作詞作曲：アンヘル・ビジョルド *Ángel Villoldo*

うた：アルフレード・ゴッピ *Alfredo Gobbi*

当時は、まだ「歌のタンゴ」というジャンルはなく、これはタンゴのリズムを持った、ヴァラエティ演芸場とかミュージック・ホール(後のレビュー劇場)のエンタテインメントのための曲といったところでしょうか。

1フレーズ(書くと1行)が8シラブルでできていて、4フレーズ(4行)で1単位となるパターンでつくられています。この詩形は、スペイン語のすべての地域で、古くから物語り歌や民謡などにも使われてきた、いちばん親しまれてきた枠組みです。

*正しいスペイン語の書き方ではなく、(ピリオド)をシラブルの切れ目に入れるようにしました。アクセント符号は文法を無視して、発音上必要なところに付けました。また、フレーズの

最後の音にアクセントが来ると、詩ではその音を伸ばして2シラブルに計算しますので、そこには下線を付けました。

*/Soy. hi.co. de. Bue.no.s Ái.res/
/po.r a.po.do «El. Por.te.ñí.to»/
/el. crío.llo. mas. com. pa. drí. to/
/que e.n es.ta. tie.rra. na.ció/
/Cuan.do un.tan.go en. la. vi.güé.la/
/ras.guea. al.gún. com.pa.ñé.ro/
/no hay. na.die en. el. ba.rrío en.té.ro/
/que. bai.le. me.jor. que. yó/*

わたしはブエノスアイレスの息子、あだ名は《エル・ポルテニート(あのブエノスアイレスっ子)》。この土地で生まれた、いちばんやくざっぽい土地っ子。タンゴをひとつ、ギターで、仲間のだれかが かき鳴らせば、この町内ぢゅうでだれひとり、わたしよりうまく踊れる男はいない。

*第2・3フレーズの */ñí.to/* と */drí.to/*、6・7の */ñé.ro/* と */té.ro/*、4・8の */ció/* と */yó/* が脚韻を踏んでいます。

(このあとの歌詞では、うまいこと言って女性を惚れさせるのも得意で、彼女に みついでもらったお金で食べてるんだ、といばっています！)

2. わが悲しみの夜 *Mi noche triste*

作詞：パスクワール・コントゥールシ *Pascual Contursi*

作曲：サムエル・カストリオータ *Samuel Castriota*

うた：カルロス・ガルデール *Carlos Gardel*

ほんとうの意味で「歌のタンゴ」というジャンルの創始者は、コントゥールシであり、その歌いかたの発明者がガルデールです。

コントゥールシは、演奏を聴いて気に入ったタンゴに、勝手に歌詞を付けてうたうアーティストでした。この曲は、1915~16年に、ウルグアイの首都モンテビデオのキャバレーに出演中に発表したもので、カストリオータ(ピアニスト)がカフェで演奏していた曲(女性の名前 *Lita* がタイトルだった)に魅せられて、作詞しました。

*/Per. can. ta. que. mea. mu. rás. te/
/en. lo. me.jor. de. mi. ví.da/
/de.jan.do.me e.l al.ma he.rí.da/
/y es.pi.na e.n el. co.ra.zón/
/sa.bien.do. que. te. que.rí.a/
/que. vo.s e.ras. mi a.le.grí.a/
/y. mi. sue.ño a.bra.sa.dór/
/pa.ra. mi. ya. no hay. con.sué.lo/*

*/y. po.r e.so. me en. cur.dé.lo/
/pa ol.vi.dar.me. de. tu a.mór/*

わたしの人生のいちばん良いときに、わたしを捨てていった女——わたしの魂に傷を、心にトゲを残して。わたしがおまえを好きだったことを、おまえはわたしの喜びであり、わたしを燃やす夢だったことを、よく知っていたくせに。わたしにはもう慰めはない。だからわたしは酔っぱらう。おまえの愛を忘れてしまうために。

(このあとには「おまえが帰ってくる幻想をいだいて、夜に部屋のドアを開けたままにしている」とか「いつでもいっしょにマテ茶を飲めるようにクッキーを用意してある」とか「洋服ダンスに、もうだれも弾かないギターがまだ吊るしてある」とか「部屋のランプもおまえのいないことを感じて、わたしの悲しい夜を照らそうとはしない」といった、現実感あふれる名文句が、今日まで共感を呼んでいます)

この歌詞は、8シラブルの10フレーズ(10行)で1単位になる詩形です。2・3、5・6、8・9で韻をふまないといけません(ここでは*/ví.da/*と*/rí.da/*、*/rí.a/* */grí.a/*、*/sué.lo/* */dé.lo/*)。さらに、7・10の韻もそろえないといけません(*/dór/* */mór/*)。なかなか、やっかいなパターンですが、パジャドール(大草原の吟遊詩人)たちが、もともと愛用した詩形です。彼らは、このパターンで、どんな題材でも、即興で(!)長々と語っていきことができました。

コントウルシは、そのフォルクローレの古い伝統から学んだわけですが、都市の、生きていることばづかいで、実際の生活・人生から生まれた感情をうたったところが「タンゴ」だったわけです。また、パジャドールの語り口の延長線上に、ブエノスアイレス〜モンテビデオの都会の口調でうたうことをはじめたガルデールが、タンゴを歌うことの創始者なのです。

一方では、劇場のタンゴも、スペイン音楽劇(オペレッタ風)のスタイルを脱して、土地っ子のほんとうのタンゴの味をもつようになりました。レビューや音楽劇の曲は、どここの国でも、まず作曲され、あとから歌詞をはめこみます。そのため音楽的な変化の魅力が増すのですが、メロディのフレーズは詩の定型の感覚からはずれるので、作詞家にはプロの芸が要求されます。

3. ブエノスアイレス *Buenos Aires*

作詞：マヌエル・ロメーロ *Manuel Romero*
作曲：マヌエル・ホベース(ジョヴェース) *Manuel Jovés*
カルロス・ディサルリ楽団 *Carlos Di Sarli*
うた：ロベルト・フローリオ *Roberto Florio*

1923年の音楽劇のための曲です。作曲者はスペイン人ですが、ブエノスアイレスに半分は定住していましたので、「本場」の味を研究して生かしています。オペレッタの前奏曲といった感じの演奏部分も、曲の構成の重要な一部になっていますね。メロディのフレーズは、伝統的なスペイン語の詩の定型とちがいます。才気あふれる作詞者(この劇の脚本家)が、実に上手に歌詞を付けました。

*/Bue.no.s Ai.res. la. rei.na .del. Plá.ta/
/Bue.no.s Ai.res. mi. tie.rra. que.rí.da/
/es.cu.chá//mi. can.ción//que. co.n e.lla. va. mi. ví.da/
/En. mi.s ho.ras. de. fie.bre y. or.gí.a/
/har. to. ya. de. pla.ce.r y. lo.cú.ra/
/yo. pien.so en. ti. pa.tria. mí.a/
/pa.ra. cal.mar. mi a.mar.gú.ra/*

ブエノスアイレス——ラプラタ河の女王、ブエノスアイレス——わたしの愛する土地、わたしの歌を聴きなさい。その歌には わたしの命が乗っている。熱に浮かされた狂宴の時を過ごすわたしが、快楽と狂気に飽きたとき、わたしはおまえを思う——わが祖国——わたしの歓楽を静めるために。

**/rí.da/ /ví.da/ /gí.a/ /mí.a/*の同韻でつながりをもたせ、最後の部分は */cú.ra/ /gú.ra/* でまとめています。

(このあと第2部のメロディは、短いフレーズ(5つの音)の積み重ねで展開し、終わりの部分は、大草原の歌ごころを生かしています。歌詞は、ブエノスアイレスの夜の魅惑をうたい、一転して「そしてミロンガ(タンゴを踊る場所=キャバレー)の出口には、パンを求めて泣いている女の子。だから、タンゴの中では、いつも悩みがすすり泣いているのだ)」

初期のタンゴの歌(ほぼ1920年代初めまで)はすべて、音楽が先行、そこに歌詞を付けたものでした。次の曲は、歌詞がまず書かれ、そこに作曲された、最初のものだと思います(1923年初録音)。作詞者は民衆的な詩人で、ルンフェルド(アルゼンチン〜ウルグアイの都会のスラング)をたくさん入れた詩を、雑誌に投稿して人気があった人です(有名になったとか、それで食べることができたというようなことはありません。商社につとめ、いろいろアルバイトしていました)。

4. マノ・ア・マノ(五分と五分) *Mano a Mano*

作詞：セレドニーオ・E・フローレス *Celedonio Esteban Flores*
作曲：カルロス・ガルデール *Carlos Gardel* /ホセー・リカルド *José Ricardo*
うた：カルロス・ガルデール *Carlos Gardel*

*/Re.chi fla.do en. mi. tris.té.za. hoy. te e.vo.co y. veo. que has. sí.do/
/en. mi. po.bre. ví.da. pá.ria. so.lo u.na. bue.na. mu.jér/
/Tu. pre.sen.cia. de. ba.cá.na. pu.so. ca.lo.r en. mi. ní.do/
/fuis.te. bue.na. con.se.cuén.te y. yo. se. que. me has. que.rí.do/
/co.mo. no. qui.sis.te a. ná.die. co.mo. no. po.drás. que.rér/*

悲しみに変わり果ててしまったわたしは、きょう おまえを思い起こし、そこで知る——わたしのあわれな人生で、おまえはただひとりの心やさしい女性だったと。いかにも金持ちっぽいおまえがいることが、わたしの巣を温かいものにしてくれた。おまえは心やさしく、裏表がなく、わたしはよく知っている——おまえが愛しただれよりも、これから愛すだれよりも、わたしを愛してきたことを。

(このあと、歌詞は5節もあって、まず彼女が金持ち男たちを手玉にとって、キャバレーの

歓楽の人生にうつつを抜かしていることが語られます。「わたしは、おまえに感謝することはなにもない。ふたりは五分五分になった。おまえがやったことも、やっていることも、やるだろうことも、わたしには関係ない。おまえから受けた恩はもう返したと思う。もし、わたしがうっかりして、ほんの小さな借りでも忘れていたら、おまえの金持ち男に付けておいてくれ」でも最後の部分では「そして明日、おまえが壊れた古家具になって、おまえのあわれな心に希望がなくなったとき、もし助けがほしかったら、もし忠告が必要なら、この友だちのことを思い出してくれ。その男は、その時が来たら、おまえを助けるためなら頭の皮まで取られたってかまわない」

1フレーズが16シラブル(8シラブル×2)の長さ、それが5フレーズで1節になります。そして、第1・3・4と2・5フレーズが韻を踏まなければならない(ここでは、/sí.do/ /ní.do/ /rí.do/ および /jér/ /rér/)という、なかなかやっかいな詩形です。でも、この詩形を厳格に守って、よどみなく、たくさんの節をつづけていくことは、アルゼンチン〜ウルグアイの民衆文学の伝統にあったことです。

このあとは、いろいろなスタイルの歌詞でおたのしみください。

5. マリオネータス(あやつり人形) **Mano a Mano**

作詞：アルマンド・タジーニ (タヒーニ) *Armando Tagini*

作曲：フワン・J・ギチャンドゥー *Juan José Guichandut*

うた：カルロス・ガルデル *Carlos Gardel*

*Tenía aquella casa no sé qué suave encanto
en la belleza humilde del patio colonial,
cubierto en el verano por el florido manto
que hilaban las glicinas, la parra y el rosal...
¡Si me parece verte! La pollerita corta,
sobre un banco empinadas las puntas de tus pies,
los bucles despeinados y contemplando absorta
los títeres que hablaban, inglés, ruso y francés.*

*-¡Arriba, doña Rosa!...
¡Don Pánfilo, ligero!...
Y aquel titiritero
de voz aguardentosa
nos daba la función.
Tos ojos se extasiaban:
aquellas marionetas
saltaban y bailaban
prendiendo en tu alma inquieta
la cálida emoción...*

6. タンゴの街 **Barrio de tango**

作詞：オメーロ・マンシ *Homero Manzi*

作曲：アニーバル・トロイロ *Aníbal Troilo*

アニーバル・トロイロ楽団 *Aníbal Troilo*

うた：フィオレンティーノ *Fiorentino*

*Un pedazo de barrio, allá en Pompeya,
durmiéndose al costado del terraplén,
un farol balanceando en la barrera
y el misterio del adiós que siembra el tren.*

*Un ladrido de perros a la luna,
el amor escondido en un portón
y los sapos redoblando en la laguna
y a lo lejos la voz del bandoneón.*

*Barrio de tango, luna y misterio,
calles lejanas, cómo estarán!
Viejos amigos que hoy ni recuerdo,
qué se habrán hecho, dónde andarán!
Barrio de tango, qué fue de aquella,
Juana la rubia que tanto amé,
sabrá que sufro, pensando en ella
desde la tarde que la dejé!
Barrio de tango, luna y misterio,
desde el recuerdo te vuelvo a ver!*

7. コリエンテス通りの悲しみ

Tristeza de la calle Corrientes

作詞：オメーロ・マンシ *Homero Expósito*

作曲：ドミンゴ・フェデリコ *Domingo Federico*

ミゲール・カロー楽団 *Miguel Caló*

うた：ラウール・ベロン *Raúl Berón*

*Calle
como valle
de monedas para el pan! . . .*

*Río
sin desvío
donde sufre la ciudad! . . .
¡Qué triste palidez tienen tus luces!
¡Tus letreros sueñan cruces!*

¡Tus afiches carcajadas de cartón!...

*Risa
que precisa
la confianza del alcohol!...
Llantos
hechos cantos
pa' vendernos un amor!...
¡Mercado de las tristes alegrías!
¡Cambalache de caricias
donde cuelgan la ilusión!...*

*Triste... Sí!...
por ser nuestra!...
Triste... Sí!...
porque sueñas!...
Tu alegría es tristeza
y el dolor de la espera
te atraviesa!...
Y con pálida luz
vivís llorando tus tristezas!...
Triste... Sí!...
por ser nuestra!
Triste... Sí!...
por tu cruz!...*

♪ミニ・ライヴ うた:峰 万里恵 ギター:高場 将美

1. ミロンガ・センチメンタル **Milonga Sentimental**

作詞:オメーロ・マンシ *Homero Manzi*
作曲:セバ스티アーン・ピアーナ *Sebastián Piana*

2. パリに錨(いかり)を下ろして **Anclao en París**

作詞:エンリーケ・カディーカモ *Enrique Cadícamo*
作曲:ギジェルモ・バルビエーリ *Guillermo Barbieri*

さすらいのボヘミアン人生に引っぱられて わたしは——ブエノスアイレスよ——パリに錨をおろしている。不幸におおわれ、つらいことに囲まれて、わたしはおまえを この遠い国で思い起こしている。

わたしは見つめている、やわらかく降っている雪を、ブールヴァーるに向いたわたしの窓から。赤い光たちは 死んでゆくようなトーンで、不思議なまなざしを持った瞳たちのようだ。

どんなに変わったことだろう、おまえのコリエンテス通り、スイパーチャ、エスメラルダ、そして場末のほうは？ だれかが話してくれた、おまえは花咲いているところだと、大通りがひと組 斜めに作られていると。

おまえは知らない、わたしの会いたい欲望を。ここでわたしは 金もなく、信じる心もなくして座礁している。誰が知ろう、いつの夜か、死がわたしを捕らえるかも。そしたら、チャウ！ ブエノスアイレス、わたしはふたたび おまえに会えないかも。

遠いブエノスアイレス、おまえはどんなにすてきだろう！ もう10年になる、おまえが 船出するわたしを見てから。

ここ、このモンマルトル、センチメンタルなフォブール(街)で、わたしは感じる——思い出が わたしにナイフを刺しこむのを。

3. アジャクーチョ通りの隠れ家

El bulín de la calle Ayacucho

作詞:セレドーニオ・E・フローレス *Celedonio Esteban Flores*
作曲:ホセ・セルビーディオ *José Servidio*

アジャクーチョ通りの わたしの小さな隠れ家。わたしが本物の遊び人だったころ借りていた部屋。わたしだけの部屋——仲間たちが 探し当ててきた、夜にカードでギャンブルするために。

自分の部屋——そこで あんなに何人ものやつらが 貧乏人生の突風にやられたときに パンと寝床を見つけたところ——

その部屋は今では変わり果てて 泣いているみたいだ。

プリムス(簡易アルコール湯沸しコンロ)は わたしの強い味方だった。安物のラム酒で働いてくれた。いつでも 熱いお湯があるので、マテ茶は あそこでは 敬意をもって待遇された。

ギターは いつも仲間だった。足りない弦はなく、よく磨かれていた。それから だみ声の金持ち男も必ずいた、歌い手になる情熱いっぱい。

ひとつひとつのものが思い出。わたしの人生を苦くした思い出。だからわたしは生きてきた、腹を立て、さまよい、悲しみいっぱい。

仲間たちは縁を切っていった、こんなに苦しんでいるわたしを見て。そしてわたしは 巣に残った、わたしの悩みを大事にあたためながら。

4. アブスルド(不条理) **Absurdo**

作詞：オメーロ・エスポーシト *Homero Expósito*

作曲：ビルヒーリオ・エスポーシト *Virgilio Expósito*

きのう 思い出していた、あなたの家……わたしの家……。入り口の大きな扉のところでは、月が待ちくたびれた。セドローン(レモンの香りのする灌木)の茂みを、時が薫って通っていく！

そして わたしたちが年をとって、もっとひとりぼっちになったのを見て、わたしは感じる——あなたのピアノの中で 泣いているひとつのワルツを。そしてわたしは思いはじめる、愛に泣いているのではないだろうか。

こうして、思い出のせいで わたしは泣く。あなたの家……わたしの家……！ あなたの愛は 黄金のケースの中で枯れている。わたしの愛は 結局は——自分を与えることで——火種がなくなってしまった。

そしてわたしたちが年をとって、もっとひとりぼっちになったのを見て、わたしは感じる——あなたのピアノの中で 泣いているひとつのワルツを。そしてわたしは思いはじめる、愛に泣いているのではないだろうか。

あれは 最初の時代だった。眠れずにできた目の隈をすぐに消えさせ、恥じらいの赤い色で顔を染める時代。そしてある夜——覚えていますか？——ひとつのキスが、桜の木の下で、わたしたちの愛に証印を押した。

愛は 結び目となることができた。でもわたしは疑う——闘うことで かちとることができただろうか！ ひとつの家は貧しく、もうひとつは豊か……。簡単に説明できる、それはできないことだったと。

5. 遠いわたしのふるさと **Lejana tierra mía**

作詞：アルフレード・レペーラ *Alfredo Le Pera*

作曲：カルロス・ガルデル *Carlos Gardel* / テリーグ・トゥッチ *Terig Tucci*

遠いわたしのふるさと、おまえの空の下で、いつの日かわたしは死にたい、おまえになぐさめられながら。そして黄金の歌声を聞きたい——わたしのなつかしむ おまえの鐘たちの歌声。

わたしにはわからない——帰るとき おまえをながめて、わたしは笑うことができるのか 泣くことができるのか。

わたしの村の静けさを破るのは ただ セレナータだけ。熱い心の巡礼者たちが 甘い銀の月の下で うたうセレナータ。花咲くバルコニーに、ひとつの誓いの ささやきが聞こえる。それをそよ風が運んでいった、ほかのいろいろな愛の悩みのつぶやきといっしょに。

いつもある、バルコニー、その花と その太陽とともに。
あなたはいない。見えないあなた。おお わが愛！

遠いわたしのふるさと。わたしの愛の土地。どんなにわたしは おまえの名を呼んでいることか！ 夢のない千の夜に、瞳に不安を宿した夜々に。

言ってください わたしのお星さま——わたしの数々の希望は むなしいものではないと。あなたはよく知っている——わたしが じきに 帰ってゆくにちがいないと——わたしの古い愛に。

6. ミロンガ・センチメンタル **Milonga Sentimental**

7. カンタンド(歌いながら) **Cantando**

作詞作曲：メルセデーデス・シモーネ *Mercedes Simone*